

Title	介護現場の再帰的省察支援の実践的方法:生成AIを媒介とした運用構成の提案
Author(s)	三ツ木, 直樹
Citation	
Issue Date	2026-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	ETD
URL	https://hdl.handle.net/10119/20564
Rights	
Description	Supervisor: 西村 拓一, 先端科学技術研究科, 博士

氏 名	三ツ木 直樹
学 位 の 種 類	博士（知識科学）
学 位 記 番 号	博知第 404 号
学 位 授 与 年 月 日	令和 8 年 3 月 25 日
論 文 題 目	介護現場の再帰的省察支援の実践的方法—生成 AI を媒介とした運用構成の提案—
論 文 審 査 委 員	西村 拓一 北陸先端科学技術大学院大学 教授
	池田 満 同 教授
	白肌 邦生 同 教授
	藤波 努 同 教授
	岡田 将吾 同 教授
	西村 ユミ 東京都立大学 教授

論文の内容の要旨

本論文は、高齢者介護の現場で AI を介護職員自身の振り返りを可視化する媒介的手段として配置し、管理者がそれに対話の資源に用いる省察支援の実践的方法を提示するとともに、その運用過程で現場にどのような変化が生じるかを観察するものである。

介護分野における AI 活用は業務効率化や意思決定支援を中心に進められてきたが、組織として共有される目的や方向性が、個人の学習や日常実践とどのように結びつくのかについては十分に検討されてこなかった。本研究はこの点を課題と位置づけ、AI を介した振り返りの可視化と、管理者による対話的な関与の役割に着目し、現場で繰り返し実行可能な運用構成を提示する。

研究対象は高齢者介護施設（デイサービス）であり、介護職員が日常業務後に記述する振り返りを AI が整理・可視化し、管理者がそれを職員との対話の資源に用いる実践環境を構築した。その環境下において、介護職員の行動様式、作業に対する目的の捉え方、ならびにチームワークの変化を、定量的指標と振り返り記述の質的分析を組み合わせることで記述した。

運用の結果、研究初期段階では作業内容や出来事の報告が中心であった振り返り記述が、振り返りを継続し管理者との対話を通じて扱われる過程で、行為の目的を含む記述へと推移し、その傾向が日常的に維持されることが確認された。これらの結果は、可視化された振り返りを管理者が組織の目的や方向性と結びつけて扱うことによって、介護職員が自らの行為を組織的文脈の中で捉え直し、行動を調整していく運用が成立しうることを示している。

キーワード： 高齢者介護， 振り返り， 人間中心 AI， 組織学習， 目的の言語化， 知識の可視化

論文審査の結果の要旨

本論文は、人材不足と制度的合理化により「考える余裕」が失われつつある介護現場において、生成 AI を媒介とした省察支援環境を構築し、「考える文化」の形成メカニズムを解明したものである。単一事業所での 12 週間のフィールド実験により、職員の省察が「行為の記録」から「目的を含む思考」へと質的に変化する過程を観察した。

本研究の新規性は三点に集約される。第一に、高齢者介護現場に AI を導入し、職員の省察支援や管理者の対話資源として活用し、その効用を多角的に記述した点である。第二に、AI を判断の代替主体ではなく「反射的・共同的媒介」として位置づけ、AI と人間の役割分担を明示した点に独創性が認められる。AI は客観性および俯瞰性の面で管理者を支援し、そのおかげで管理者は効率的か思い込みを防いだ職員支援を実現した。第三に、意味生成を中心概念として、AI 媒介による再帰的学習の理論的枠組みと実装可能な評価手続きを提示した点に学術的・社会的貢献を有する。

職員および個人情報保護を配慮し実証実験は適切に設計され、データ収集と分析の手続きも妥当である。一方で、提案概念の表現及び意味の再考、理論的枠組みの最適性については検討の余地がある。理論的主張と実践内容の間にいくぶん乖離が見られるが、デザイン科学研究として捉えれば意義は明確である。

本研究は人的資源が限られた介護現場において管理者が職員の省察を生成 AI によって補助する仕組みを実装し、生成 AI および管理者の役割を明確にして、運用可能性を実証した点で実践的有用性が極めて高い。介護分野にとどまらず対人支援や知識集約型組織における人間中心 AI の実践的方法に重要な示唆を与える。本研究は独創性、体系性、実証性を備え、国際誌掲載論文を含む一定水準の論理性と説得性が認められる。以上の理由から、本論文は博士(知識科学)の学位に相応しいものと判断する。